

六花



RIKWA

11

俳句雑誌りつか
2015 (平成27年)

cover design Yuna Mizuno

こん
今

菊日和

山田六甲

菊日和ジャニスのサマータイムかな

日の方へねぢれてゐたる唐辛子

羽衣をぬぎはじめたる後の月

秋潮にきびすを返しゐたりけり

蜘蛛の囀を山吹色に秋の暮

身に入むや夜風に人の動きをり

山車蔵に夜なべの児らの眠からず

秋の夜の山車に太鼓を打ち込める

端溪に墨おろしをり秋の声

ジャニス・シヨプリン

風神の芒を降りてきたりけり

大山榊水高原

身のほろと舟屋の伊根の月見豆

伊根に覚め二百十日のあくびかな

山水を引く竹細し秋の暮

印南の寝顔なりけり十三夜

田の端に豆殻を焚く奥丹波

ころころと転げて楽しすずめ瓜

コスモスの月に摘みしをおみやげに

松下さん2句

毛糸編む指のしなやかさを今に

大屋根に柿を持ち来し鴉かな

草紅葉魚籠の漢の通りけり

阿あ那な邇に夜や志し愛え袁を登と古こ袁を石叩

阿那邇夜志愛を袁と登め袁を雀瓜

水澄むや水といふ名のなき頃も

印南に二神山や雁の棹

印南や後の十六夜月上げて

ゆる坂の茶の花垣を歩みけり

谷性寺之句

実南天寺の小さな池に垂る

石路の花きらひだつたね日暮れけり
身に入むや数多なる誤記誤植して
ゆで卵きれいに剥けて冬に入る
わだなかも小春日和や垂水岬
秋高し播磨灘へと日の移り
衣被布巾に包み剥きにけり
行く川も来る川も秋暮れにけり
揺れながら月になりゆく芒かな
秋草のもれ灯にぬれてをりにけり

人
気
な
き
生
家
に
入
る
る
盆
の
風
夫
待
た
せ
よ
ろ
づ
や
に
買
ふ
盆
干
菓
子
四
方
よ
り
風
あ
り
門
火
焚
き
に
け
り
廃
れ
ゆ
く
国
体
道
路
花
カ
ン
ナ
堂
守
の
腰
に
つ
り
た
る
蚊
遣
香
空
蟬
の
か
ら
ま
つ
て
ゐ
る
竹
箒
切
売
り
の
西
瓜
に
種
の
裏
お
も
て
大
橋
の
灯
の
細
り
ゆ
く
月
の
海
た
わ
わ
な
る
桐
の
実
風
を
寄
せ
つ
け
ず
高
階
に
鈴
虫
鳴
か
せ
夫
病
め
り

厠より蚊を叩きたる音のあり 佐津のぼる

かわやよりかをたたきたるおとのあり さつこのぼる

涼しさや水にのせたる亀の顎

月光の透ける高みへ蜘蛛の網

厠より蚊を叩きたる音のあり

湯のやうな水炎昼の蛇口より

日焼して潮のにはひの子の帰る

厠から蚊を打つ音が聞こえた、と事実だけを詠んだ。寺か山荘を想起する。「事実だけ」といったが厳密にはパチツと音だけ聞こえたにすぎない。しかし蚊を打ったに違いないと経験に即して断定したのだろう。事実に忠実に「蚊を打ったようだ」と推量してよんだのでは間が抜ける。断定したことによつて、用の途中で必至に蚊を打った気迫が出た。水洗でなく汲み取りの旧式便所に「厠」という言葉を斡旋したのも適時打となった。読者の経験を頼みに、厠の主人公が中腰で蚊を打つ仕事を想像させ、狂言をも連想させる。ここで使った題材がけつして下品ではない事を言っておく。

雪卿集

白
扇

松本文一郎

白扇や席を譲られ老を知る
夏の雲音を吸ひとり機影のみ
炎帝の野中の道を白くせり
旧盆に十日も早き墓参かな
不揃ひの朝採りトマト廉価かな

蓮

志方章子

あめんぼの影水底に大写し
蓮の葉に蓮の花びらくづほる
口尖るプールの授業なくなる
夏草やにきび潰してゐる少年
端居して楨の青さの今更に

雪卿集

遊 印

升田ヤス子

暑気払ひ遊印押して終ひなる
金魚掬ひ破れかぶれになる一瞬
秋の夜の箱の補聴器ぴいとなる
けさ秋の子の髪結へば跳ね返る

先師

鉄線忌師と尋めゆきしたたら跡

秋の朝

出口

誠

不安感ぬぐひきれずに秋の朝
大量の荷物ありけり秋の朝
空き地にも光るものあり秋の朝
帰りなばまづエアコンの残暑かな
秋暑しイベント準備進みけり

雪樹集

あめんぼう

赤松有馬守破天龍正義

群れはづれ蟻のそそくさ歩きかな
あめんぼう股のぞきして見てをりぬ
縦ななめ激しき雨の秋出水
通夜の座に澄みたる油蟬の声
銭金に狂びし盆の踊りかな

去る燕

溝渕弘志

富士山の残暑ハガキが届きけり
去る燕子育ての頃目に浮かぶ
鈴虫の番貰ひて夢枕
試食梨細かく切られ置かれけり
桃の実や被り吸い付き嘗め回す

世界一読みづらい評で殆どの会員は自分のところしか読みません。蛭雪譚はもとも「菜根譚」が原点です。

蛭雪譚

六甲選

二十七年十一月号鑑賞

人は一生のうちは何句詠めるかわからないが、あと一分頑張れば一生一句に巡り会っていたかも知れないと思うことがある。貴方はその句に巡り会うため、必然に生まれてきたのだと天がささやく。あと何年与えられているかと思うと焦るが、西東三鬼は山口誓子に「あなたが釣りにいそしんでいるときに名句が通り過ぎるかも知ません」とそういう主旨のことをいわれた。三鬼が古川の別府に住んでいた頃の話。宇宙から生命が地球に降ってきているという。その話も書いた。俳句の生命が毎日毎刹那、降りそそいで来ているのに、じっとして居られない。そう思つて自らを叱咤し、かつ楽しんでいるのか、と自問自答している。さて貴方はいかがだろう。

人気なき生家に入る盆の風

笹村 政子

久しぶりに盆帰省して、誰も住んでいない実家の戸を開けた。息が詰まりそうなかび臭い熱気が襲う。取り敢えず、荷物を上がり框に置いて、家中の雨戸を開けて廻る。とたんに外気が家の中

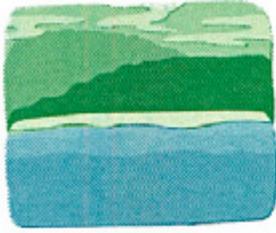
を通り、かび臭い匂いも去って、落ち着いた。その安堵感はあるものの、既に父母の姿がない空虚感が風に入れ替わって湧き上がるのだ。

夫待たせよろづやに買ふ盆干菓子

よろづやというのは万屋と書き、取り敢えず必要な食料品や日用雑貨が売られている店。通りすがりのことであろうと思う。「ちよつと待ってつて」と夫を外に待たせて、盆供用の干菓子を買った。お墓や仏壇に供える本格的な菓子ではなく、部屋にある物故親族の写真の前にも供えるものだろう。通りすがりに買ったことが「よろづやに買ふ」でよく表されている。(以下略)



六花集



平居 濤子

富士山を従へ夏の縦走路
生徒らの足裏白き平泳ぎ
ライバルと手花火の火を分けあへる
仰ぎてもなほ滝口の見えざりき
水やりに明け暮れし夏果てにけり

谷口 一猷

原因はつまらないこと水中花
水中花ワイン一滴落としけり
頬濡らし嗚呼水中花きつと愛
淑やかに纏れてをりし水中花
水中花に水やり過ぎてふことはなし

大内 幸子

風の筋居間にもありて陶枕
蝉時雨パン屋の声の紛れ込む
手仕事のこま糸転げ小さき秋
新しきノート綴ぢ足す初ちちろ
朝顔の新種の絡むフェンスかな